HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	佐々木市夫著, 『畜産経営の環境と適応プロセス』, 明文書房, 1992年, 275頁
Author(s)	崎浦, 誠治
Citation	北海道農業経済研究, 2(2), 58-60
Issue Date	1993-03-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/62892
Type	article
File Information	KJ00009064868.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［北海道農業経済研究　第２巻２号　1993.3］

［書　　評］

佐々木市夫著『畜産経営の環境と適応プロセス』

明文書房　1992年　275頁

酪農総合研究所　**崎浦　誠治**

1

現代は情報化社会と称されて、おびただしい量の情報がわれわれの周囲を取り巻いている。へたをすると、情報の洪水によってわれわれ自身が流されてしまいかねない程である。昔の農家、農村にとって商人や産業組合職員、農会技術員がそれぞれ農産物や投入資材の価格、農業技術に関するほとんど唯一の情報源であって、知り得る情報量もごく限られていたのである。しかるに、こんにちでは大量の情報が各種メディアを通してこれでもか、これでもかといった具合に押し寄せて来て、情報を受け取る側が対応に困難を感じるというのが実情である。したがって現在の農業生産者が直面している最大の課題は大量の情報をいかに整理し、選択してこれを経営発展の上にどう役立てていくかということであるといっても過言ではない。

加えて近年農産物貿易の自由化が進むにつれて、時々刻々変化する市場情報や日進月歩の技術情報から眼が離せなくなって来ている。一例を挙げれば１９９１年４月から牛肉の輸入自由化が始まるに及んで、その前後から乳用種牛肉ならびに個体の価格が暴落して、そのために酪農家や乳用種肉牛飼育農家が莫大な収入減退に追いこまれたが、こうした時代になると、かつて政府が主要農産物の需給や価格に対して大幅に干渉を加えていた当時にくらべて、情報の収集選択とその処理の重要さが一段と増してきたといえる。

おそらくこうした時代の要請が本書のような著作を生み出す背景となっているに相違ない。本書のキィ・ワードは「情報」や「環境適応」であるが、両者とも我が国農業経営研究にとって比較的新しい概念であって、これまであまり本格的に論じられてこなかったが、著者はこの斬新な概念を基調に据えて畜産経営を解明することを本書の主題としている。

方法上では著者は事例研究に中心を置いている。その意味では第II部「北海道における環境と適応実態」が本書の基礎的部分であって、北海道内各地の畜産経営の先駆的な適応事例が７章に亙って叙述され、検討されているわけであるが、しかし著者は単なる事例紹介による叙述整理的研究に終らせることで満足しない。本書を書いた著者の眞の意図は、単なる事例研究の域を越えて「理論づくりのフィードバック作業」を試みることにあるということができる。それだからこそ著者は第Ｉ部「畜産経営の環境適応モデル構成」を提示して、自らの理論的フレーム・ワークを与えてくれているのである。

かかる著者の意図を考えれば、第Ｉ部と第II部が本書の根幹部分だと判断してさしつかえなかろうと思う。

2

それでは第Ｉ部、第II部の各章について順を追って概要内容の紹介を行なうとしよう。

まず第Ｉ部第１章から。第１章では情報意味論

の領域において先駆的、包括的な業績をあげた吉田民人の情報論に着目し、かれが「記号とそれが表示する意味の対応を転換としてとらえ」、「不確定性の下の人間もしくは社会システムの行動の問題と結びつけ」て情報論を展開したことを著者は高く評価して、それが農業経営理論を考える上で手がかりを与えるという。

ついで第2章では畜産経営を取り巻く市場環境が近年一段と不透明さを増し、概存知識の適用が限定を受けて生産現場に即した現場情報が強く求められていることを指摘するとともに、環境との相互作用をつうじて問題を發見し、新たな意味を見つけ、さらにその解決方法を創造したりする立体的プロセスの重要性を強調する。そして環境変化に適応する技術パターンとして、概存技術体系の精緻化を含む4つのパターンを区別した上で、工程イノベーションの例として芳賀牧場、泉牧場を、境界イノベーションの例として島田養鶏場のケースを掲げる。

第3章はこれらの各ケースから得られた技術革新プロセスの命題に関して、ハイエクやクーンの見解に依拠しながら再検討を加え、情報の収集から集約・開發・評価というプロセスを経て、当事者情報の創造にいたる経過について叙述する。

第II部は先述のように北海道内各地におけるさまざまなケースの畜産環境への適応実態についての調査結果の報告であるが、まず乳用おす子牛の技術パラダイム確立のための模索過程において示された生産者の技術選択行動が紹介される（第1章）。

第2章（酪農）および第3章（乳用おす子牛）では技術の「慣行軌道にのった同じ技術パラダイムのもとでの自立化とその充足過程」およびその問題点について論及している。そして酪農ではこうした農家群でも技術パラダイムの再構築を含めて新たな要件充足に向けての試行と選択淘汰が胎動し始めていること、また乳牛おす子牛肥育では経営と環境との境界領域における情報収集力、交渉力が経営のダイナミズムを見究める上で重要になってきたことを指摘する。

第4章（酪農）、第5章（和子牛）はそれぞれ予想される新しい市場環境に備えて新たな模索過程に入った農家群に関する調査結果の報告に充てられる。そのうち第4章ではフリーストール・ミルキングパーラー方式について、著者はこの方式がかえって情報処理員担を増大させる可能性があることを警告すると同時に、和子牛生産においては放牧や野草利用の促進、公共育成牧場のサービス機能の充実、ならびに生産現場における情報交換の場の組織化などを提言している（第5章）。

第6章は乳用おす子牛の一貫肥育を行なう鹿追町の肉牛センター、第7章は農協リーダーシップのもとに和子牛生産を継続する今金町の事例紹介である。

第I部、第II部につづく第7部はイギリスを訪問したさいの調査結果をまとめたものであるが、本書の主題に関連して著者は、イギリスでは酪農側、肉牛側両主体間の相互関係において雑種強勢効果をあげていること、そこで社会的に形成された情報の多重利用と、それを媒介とした相互承知、相互制約の関係が成り立っていることを見のがすことなく、そこに注目している。

3

ドイツ農業経営学の代表的理論家ブリンクマンはかつてその著『農業経営経済学』の中で、静態的経済なるものは現実にはありえない、経済生活は絶えず動いており、發展していること、そしてその動態的要因として、国民経済の發展に伴なう需要の増加と技術改善の二つを挙げたが、これが農業経営学において静態と動態とを区別した最初であろう。それ以後農業経営研究者は動態的な経営問題を常に心掛けてきていて、その理論化に向

けての「悪戦苦斗の取り組み」が数多く行なわれてきたが、本書は情報と環境調整という新たな概念を切り口にして、この課題に新しく挑戦したものということができよう。その意味で私はまず著者の意欲的な挑戦に対して高く評価したいと思う。

その上で、事例研究を一歩進めて、方法論を準備した上で理論化を目指す著者に望みたいことは、吉田民人の情報論に対する著者の考え方をいま少しく詳細に、誰にでも分るように説明してほしいということである。著者は記号変革論に「違和感」を抱き、もう少し検討しなければならないことを説き、実践者の立場からの記号変換論であるべきことを求めているが、この点いま少しく積極的に著者自身の見解を披瀝して欲しかったというのが評者の感想である。もし「配慮すべき点がいくつかある」とすれば、全部それを出し尽して欲しかったと考える。

さらに欲をいえば、不確実な環境のもとにおける情報プロセスの失敗例を挙げてほしかったと思う。本書第II部に掲げられた各地にの事例は比較的順調に軌道を歩んだものがほとんどだが、これと対照的事例を掲げれば、情報プロセスの意義がもっと鮮明に現れたかもしれないからである。もちろん失敗事例の研究はその対象を選ぶことすら容易でないことが分るが、別海、中標津など根室地方の調査も行なわれていることであるから（第II部第2、第4章）、少しくアシを延せば新酪農村におけるスチール・サイロの建設とその利用実態に迫り得たはずである。新酪農村のスチール・サイロは営農設計の中にその建設が義務づけられ、融資条件にもなっていたはずであり、個人の選択が許されるようなものではなかった。それであれば、計画した側はスチール・サイロに関する萬全の情報を持ち合わせると同時に逐一酪農家にその情報を流すべきであった。さもないと実施主体は「危険を負担せざる企業者」となるからである。

他方生産側についていえば、多額の投資を伴なうだけに、スチール・サイロの導入に関しては細心の注意をはらって十分な情報を収集し、現地の環境条件に合致するよう現場情報をつくり上げて、その利用に習熟することが必要であったと思われるが、実際にそれがどう行なわれたか、情報研究の立場から詳細な分析がほしかった。もしそれがあると、情報と環境調整プロセスに関して、「光と影」のうちの影の部分が明らかになるし、情報のもつ意義がもっと浮彫りにされるであろうと考えるからである。しかしこれは望蜀の評かもしれない。（著者は帯広畜産大学）

太田原高昭著『北海道農業の思想像』

北大図書刊行会　1992年　257頁

北海道地域農業研究所　**千葉燎郎**

ユニークな書名である。「北海道農民の思想像」ではなしに、「農業の思想像」とある。今日にいたる北海道農業を形づくってきた幾多の人びと、げんにそれを担う人びとを支えるものの見方・考え方、それも抽象的なものではなしに、具体的な実践活動にあらわされたものをとらえてみようというのが、著者の意図であろう。「あとがき」の末尾（256頁）で、著者はいう。「北海道の大地に刻み込まれた多くの農業者の思いや、その心を心として研究に打ち込んだ学者の精神を表現するのに（このタイトルが）適切だと思われたからである」と。

まず、目次を掲げよう。

I　農民運動の形成と展開
　1　農民運動の黎明
　2　農民同盟と農協組織
　3　農民運動の栄光と残照
II　地域農業の精神風土
　4　農村政治の底流を探る